每月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵稅共五十錢）

編輯兼發行人　香山清和
發行所　長野縣上田市 上田蠶絲專門學校 千曲會
印刷所　長野縣上田市原町 中澤印刷所

謹賀新年

山本三六郎著
化學純絹絲の工業的完成　¥0.30

蠶絲科學研究會編
伊太利蠶絲絹業の衰退原因と其現況　¥1.50

菅原勇治著
改正蠶絲業法規要論　¥2.30

長野縣上田市
發行所　蠶絲科學研究會
〔振替長野6413番〕

國民の大覺悟を促がす

榛嶺生

昭和十一年の年頭に於て先以て我蠶絲業界の前線に立ちて活躍せる同人諸君の御健康を祈る。

多忙なりし昭和十一年よ。世界は不相變益々非常時氣分に浸りつゝ行く。西歐に於ては伊エ問題を中心に東亜に於ては北支問題に繋つて天下は實に騷然たる狀態に置かれてある。唯喜ぶは吾蠶絲業界の前途の光明を認めたことである。昨年に於ては頗る前途を危殆視せられたる向きもあつたが、人絹の彼の進出に拘はらず蠶絲業は獨自の立脚地を有して優に其の永遠性を確認せられたることである。同人は今後益々科學的に諸般の研究を遂げ斯業生産物の世界的に躍進することを企圖せねばならぬ。それには從來の型を破りて根本的の研究に待たざるべからず。直に目前の利用に供せらるゝ様な現業者の實驗的の雜駁なる腰だめ的作業は既に時代遲れである。斯業經營者も又上局にあつて多數の部下を指導する者も皆此の點に理解を持たねばならぬ。直に役に立つやうの檢索も一概に排斥すべきではないが之れのみに沒頭する時代は已に過ぎ去つた事と深く注意を要するのである。

扨て非常時に處するには打算的では行かぬ。平時に於ては打算的でなければならぬが、平時と非常時とに於ける國民の氣の持ち方の相違はそこにある。ところが經濟學の發達の結果何れの場合にも打算的に事を處せんとする習慣に捕はれてゐる嫌がある。假令ば即今の問題である。列國海軍力に就て見れば其の數の優劣を以て打算的に謂へば戰はざるに已に破れてゐるのである。又絕大の建築物を見ても萬古に其偉大を誇るものは常に豫算などに拘泥し企圖されて出來たものではない。彼の萬里の長城でも羅馬法王の宮殿でもエヂプトのピラミッドでも皆然りである。偉人は須らく超打算的に躍進すべきである。而して飽迄目的の貫徹する迄は時を超脫して努力を繼續すべきである。中途にして廢するは懦夫の行爲である。偉人の行動偉大の事業は古今皆超打算的であつた。彼の大戰後に於て起りたるフユーメの問題を見てもよくわかる。伊國が聯合國に加擔して聯合軍が勝利を得たるに拘らず、聯合國の伊國に何等酬ゆることなく却つて從來伊國管理の下にありたるフユーメを取上げて聯合國の監督下に移した。愛國の文豪ダヌンチオは烈火の如く憤りて、英、米、佛三國の兵の守衛せるフユーメを夜半攻擊した。爲に三國は海路九艘の聯合艦隊を編成して之を攻擊すべく軸艫相銜みて海を壓して來た。之を探知した海軍少將リユツオー將軍は僚友と唯二艘のモーターボートに水雷を載せて曙の靄を利用して中途に要擊し聯合艦隊を全滅せしめたのであつた。吾日本に於ても彼の弘安の役を回顧すれば實に血湧き肉躍るを禁じ得ざるものがある。敵將忽必烈の祖父成吉思汗は蒙古を平定し吾承久元年に四子及哲別、速不臺の二將軍を率ゐて遠征の途に上り、南は印度、アフガニスタン、ベルチスタンを征し西は波斯から高加索山脈を越へて遠くロシアの東南部を征し、其子太宗は南の方金を亡ぼして其他を合せ又兄求赤の子拔都をして歐羅巴を征服せしめ、ロシアの大平原を橫切り遠くポーランド、シレシアに入り四條天皇の仁治二年(一九〇二年)リーグニッツの戰にポーランド、獨逸の聯合軍を破り別軍は今のルーマニア、ハンガリーを平げ全軍墺太利のウイーンに於て合し、更に西南に進まんとしたが會々太宗の訃に逢つて凱旋し、獨り拔都はウォルガ河畔のサライ(Sarai)に留まり欽察汗國を建てた。其れから一代を經て憲宗に至り高麗を征服し、弟旭烈元をして西征せしめ、旭烈元は後深草天皇の正嘉二年(一九一八年)バグダードを陷れて伊兒汗國を建てた。之と同時に忽必烈は支那に侵入し大理國を亡し安平を平げ進んで宋の都に迫らんとしたが憲宗の死に遭ひ宋と和して北に歸り、龜山天皇の文應元年(一九二〇年)に帝位に即き國號を元と稱するに至つた。弘安二年遂に宋を亡し、父祖の大業を繼て全世界を征服して世界の帝王たらんとした。眼中固より日本を認めず一威嚇を以て併吞せんとして第一回の使を日本に派し、降服入貢を迫つた。文永五年正月に第二回の遣使をなし傲慢無禮の態度を以て一氣に屈服せんとしたが、後嵯峨法皇は御五十祝賀の催しを中止し二十二社に國難を告げ祈禱をなさしめ鎌倉執權北條時賴は歸化僧道隆を顧問として斷然遣使の要求を拒絕し、三月に時宗十九歳を以て執權となり全世界を席捲せる蒙古の大敵を向にまはし正氣八荒を蓋ふの意氣を以て之を擊破するの決心をしたのであつた。忽必烈は怒りて數次使を派し益迫りしが幕府は之を或は追還へし或は斬首し吾決心は微動だにせぬのであつた。茲に於て終に文永十一年高麗の南端より大軍を進め陸兵二万三千、水手六千七百人戰艦九百餘艘を將ひて對馬の佐須奈に着いた。守護代宗助國僅に八十騎を以て之に當つた。眼中固より敵なく亦生死もなかつた。防戰大に努めたが刀折れ力盡きて二子と共に戰死した。敵は暴逆を恣にし慘酷を極め、十九日に博多に迫つた。諸將力戰し水城(太宰府にあり)を唯一つの頼みとして防禦した。幸ひに神風起り敵軍の死者一万三千五百餘人を算し大敗して引揚げた。遂に弘安四年の大難となつた。同年三月忻都、洪茶丘は師を將ひて出發し五月三日元、高麗軍を合せて四万、戰艦九百艘合浦を發し二十一日壹岐を侵し六月五日志賀島に着した。河野通有等の奮戰は此時であつた。別軍即ち江南軍は范文虎を大將として、期に遲れて(數十日)兵十万、艦三千五百艘の大軍を以て侵擊した。吾軍は兵器に於て數に於て全然比較にならぬ、幸に又神風が七月二十九日夜から一日の曉にかけて起り、諸將の奮戰と共に敵の大軍を殲滅することが出來た。文永の初年から弘安の役迄前後約二十年間我々祖先の奮鬪は實に吾日本精神の表徵として觀取すべきものである。當時敵狀に通ぜず盲目蛇に怖じずと云ふ狀況にあつたかと謂ふに決して然らず、道隆等の敵狀精通者ありて情勢は能く辨つてゐた。當時若し今日の如く萬事打算的に行くならば戰はざるに既に降服してゐたに違ひない。吾々日本男兒に貴ぶべきは實に此の意氣である。生死辨脫超打算的の行動主義が出來なければ非常時を突破することは出來ない。口に非常時を言ふものは必ずや同時に此の超努力を覺悟して進まなければならない。此の決心と此の意氣とを以て進めば現下の蠶絲業の打開も農村の更生も對外貿易談判も、汎く言へば全日本の經濟更生も決して不可能の事はないと信ずる。只人が打算的に捕はれてゐる間は駄目だ。要するに打算的は眞劍味の起らない證據である。自己の我利主義から脫却し切れない證據である。現下我國民全般に此の大勇猛心を喚起することが最も大切である。特に躍進日本の花形役者を勤むべき青年に此の覺悟がなければならぬ。先以て私利吾欲の念を去れ。之が大覺悟に突入する前驅である。嗚呼昭和十一年は非常時打開の實力を發揮する年よ。身體を鍛へよ。精神を鍛へよ。

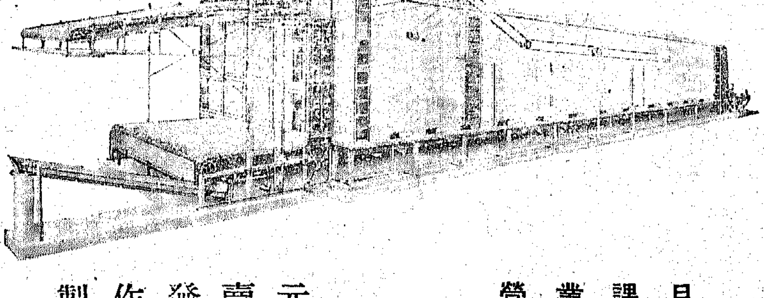
『歷史事實は齋藤斐章氏の日本國民史に據る』

謹賀新年

現代乾繭機界ノ王座
大和式自動輸送乾繭機

【各種型錄贈呈】

二五九六年代表型



製作發賣元
株式會社
大和三光商會
東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇番

營業課目
特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動人絹乾燥機
特許帶川三光式乾燥裝置
特許やまとホイロ
特許サンケー式濾過淨水裝置
特許サンケー式廢湯吸熱器
特許サンケー式高壓ポンプ
特許サンケー式トラップ

村から市へ躍進
岡谷近況

今井生

絲の都岡谷も愈々新春四月より日本一の村から一躍岡谷市へと名實共に工業都市の仲間入をすることになつた。幸に絲況も好運の浪に乘つたし、相當健實なる持續性も窺はれるのでこゝ岡谷一帶は全く濺溂たる陽氣と溢るゝ歡喜の交響樂である。

モダーン廳舍も竣成したし繭檢定所も新設しつゝある。縣の健康保險課支所の設置も近きにあり、乾繭斡旋所や生絲檢査所の擴張も既に計畫ずみだ。其他道路の改裝に公共的機業施設の整備に、交通網の改善に觀光設備の計畫に全く工業都市への面目完成に着々邁進の實を上げ如實に躍進岡谷の姿を表現して居る。

▲位置及沿革

本村は諏訪湖の西北に位し、東は長地村に接し西南は川岸村につらなり、南方諏訪湖及天龍川を隔てゝ湊村に對してゐる。天龍川口一帶のこれ等諸村に亘つて日本一の製絲業地を形成する所謂岡谷地方の中核である。地形は湖岸より次第に隆起し、西北方に鹽尻峠を負ふも國道八號線は之を越へて東筑鹽尻町に通ずる。縣道下諏訪伊那線によりて南下すれば川岸村を經て伊那に到るべくこの二線は本村の中央に於て縣道岡谷鹽尻線により連絡する。

又神宮寺岡谷線、下濱下諏訪線の兩縣道は本村を起點とし前者は湊村より諏訪湖南岸に沿ひ諏訪神社上社に達し、後者は湖畔を東走して下諏訪に連つて居る。更に鐵道中央線は東方下諏訪驛より來りて本村岡谷驛を經て西南方川岸驛に向ひ四通八達誠に交通上の要衝に當つて居る

本村往古の事蹟としては古く延喜式に官牧岡谷牧の記載があり、吾妻鏡も亦之を報じてゐる。鎌倉時代以後或は諏訪社々領となり或は武家の領治地となつて德川時代に入り慶長六年に到りて舊主諏訪氏の藩領に歸し以て明治維新に及んだのである。而して明治以前に於ける本村地域は七ケの小村に分れ殆んどみな農耕を業として居た。只岡谷村が中仙道より分岐し尾三兩州に通ずる脇往還伊那街道の道筋に當る準宿驛として馬繼問屋場あり、また今井村が中仙道筋鹽尻峠下の要地として本陣の設けありしのみ一般に茅屋點々たる寒村に過ぎなかつたのである然もその耕地面積は狹少で地味も惡く秋冬長期に亘る寒冷の氣候は野外の勞働を妨げて村民の生活を頗る困難ならしめ到底農業のみを以て生計を立つることは不可能であつた。

この事情は却つて村民に勤勉努力の風を養ひ進取果敢の精神を醸成せしむる原因となつて、こゝに德川時代中期の頃より副業として綿打綿商及生絲製造販賣等の業が行はるゝに至つたのである。

この地の占むる位置即ち表日本と裏日本及裏日本と西日本との接觸地帶として當時もその各方面に交通路を有して居たことは之等特種産業發達の上に重要な因子となつた次第である。

殊に幕末外國との通商開始によつて棉花商工業は衰運に赴いたが、生絲は海外の需要年と共に多く遂には舊國輸出品の首位を占むるに至りしを以て、本村斯業の飛躍も著るしく横濱開港當初より輸出を行ひし者さへあつた。

明治の聖代となり七年十月舊七ケ村を合併平野村と稱するに至つた。明治以後に於ける村内製絲業の發達に至りては全く驚異的の事象で明治初年洋式器械製絲法輸入せらるゝや早くも六、七年後には村内業者の之に倣ふ者多々あり、然も彼我折衷工夫大いに努め實狀に適應する施設經營を行ひて器械製絲工業を日本化實用化せしめ十五六年に至つては生絲の生産額は他の先進國を脽して一躍全國の中樞たる地歩を占めたのである。かくて累年業勢は增大し日清戰役前後よりは村内事業の擴張と共に郡外縣外への進出目覺ましく原料繭亦全國各地に及び、内地は勿論朝鮮支那等に迄發展し其關係範圍は非常に廣汎となり、其書渺々たる一農村は今や世界の岡谷と稱せられ、その名海外にも著聞すると同時に村内戸口稠密商工業殷賑諸般の村勢も異常の發展を示したのである。

▲本村の戸口

本村戸數人口の增加は製絲業の發達に從ひ左表の如く著るしく昭和五年國勢調査の結果に於いてはその人口全國第一位の大村となつた。又本年國勢調査の結果概數に於いても近年施行都市に比して遜色なく、尙本年國勢調査に際し内閣總理大臣の認可を得て特に施行せる附帶調査の結果は次の如きものである。

業態別　世帶數　千分比
工業　二、二八一　三六六
商業　一、四〇九　二二六
農業　八二八　二三三
其他　一、七一五　二七五

即ち商工業戸數千分の五百九十二を有し優に都市の形態を備へて居る。

尙戸口の變遷を擧ぐれば

年次　戸數　人口
明治五年　九三五　四、四一二
全十四年　一、〇四〇　四、九〇五
全廿四年　一、一〇七　五、九八九
全四十三年　一、九四九　二七、四一五
大正四年　二、一八九　三、一五三〇
全九年　四、一八六　四四、二七八
全十四年　五、一二六　四九、〇一四
昭和五年　六、四六二　五三、八七五
全十年　六、二三三　四一、三三三

本年度調査に於ける減少は昭和五年以來の生絲不況の結果である。

▲本村の産業

本村産業の根幹たる製絲業は明治初年以來五十餘年間に急速度の發展を遂げ、之に附隨して戸口稠密を來し各種商工業の振興を見、今や本邦輸出貿易の大宗たる生絲生産の中心地として國家經濟の上にも重要なる位置を占むるに到り、廣く海外迄も世界の岡谷と喧稱されつゝある生絲が世界的商品なるを以て海外事情に基づく價格の變動により、時に浮沈はあつたが村民傳統的の進取不屈の勘儉は既に世界經濟恐慌の域を脱したものと云ふべく、製絲業に附隨して興りたる他の産業も各々獨自の發展開拓に努め業界を擧げて商工都市建設に邁進して居る。

▲度量衡自治取締の施行

本村産業の長足なる進歩發達により大正十一年より度量衡自治取締をなし昭和七年よりは第一種取締の指令を受けてゐる。現在本村以外第一種取締省略の自治取締を行つてゐる市町村は全國にても廿一市八町一村の少數主要地に過ぎない狀態にある。

▲教育

本村小學校は一校制で兒童五一六六人學級數九五を算し、今井、岡谷山、岡谷下、中央、小井川、田中の六部校に別ち收容して居る。本年に於ても翌年度增加兒童收容のため中央部校に八教室の校舍一棟を增築した。中等學校には縣立諏訪蠶絲學校、縣立諏訪第二高等女學校あり、前者は一萬坪の敷地と三十萬圓の建築設備費を後者は八千坪の敷地と建築設備費廿五萬圓の地元寄附により竣成したもので内容外觀堂々たる校舍である。

尙近き將來に於いて中學校工業學校等の建設も計畫されつゝあるやに聞く。青年學校は工場地帶の故を以て特に意を注ぎ目下生徒男三一九名女二二二名で特に教練用器材の充實は模範的である。

▲九年度製絲概況

諏訪製絲研究會事務所の調査によれば昭和九年六月一日より十年五月三十一日迄に於ける本村のみの工場數、釜數、生絲生産高、販賣價格等次の如くである。

輸出工場四七　同釜數一三、八九九
國用工場七五　同釜數一、一二四
本年度生絲製造高　四九〇、九〇三貫
本年度販賣數量　五〇二、六〇二貫
本年度販賣價格　一五、二一三、五六一圓
副産物收入高　三、六五二、二二八圓

尙諏訪湖畔一帶町村の總釜數は三萬四千餘釜に當り、本村のみにてその半を占めてゐるので製造能力も概ねその半と見て差支へない。故に名實共に絲都の貫錄を示してゐる次第である。

この新都市岡谷には櫻花匂ふ陽春四月大日本蠶絲會總會も開催されんとしてゐる。吾等は躍進岡谷市の實現を衷心より欣賀すると共に親愛なる同窓各位の御來市を熟望し且つ歡談の機會を祈つて擱筆する。

入學案内

一、募集人員　養蠶科(四〇)　製絲科(四〇)　絹紡織科(二〇)　通計約百名
一、出願期日　試驗檢定　一月十一日より三月十三日迄
　　無試驗檢定　一月十一日より一月卅一日迄
一、試驗科目　數學(代數、平面幾何)　英語(英文和譯)
一、試驗期日　三月二十日(午前學科、午後體格檢査、口頭試問)
一、試驗場所　上田(本校)　東京(東京文理科大學)　名古屋(愛知縣廳脇東新小學校)　京都(京都高等工藝學校)　岡山(岡山醫科大學)　福岡(九州帝國大學農學部)
一、入學案内書入用者は郵券二錢封入本校教務課宛申込次第送附す

教婦養成科入學案内

一、募集人員　約二十名
一、出願期日　一月十一日より三月廿五日迄
一、試驗科目　數學(代數、平面幾何)　國語(作文を課する事あるべし)
一、試驗期日　四月二日
一、試驗場所　本校
一、入學案内書入用者は郵券二錢封入本校教務課宛申込次第送附す

昭和十一年一月

上田蠶絲專門學校

史汀餘稿

草野史郎

一、松窓漫筆

題して松窓漫筆といふ、蓋しお正月の松の内に物する意味なり。輝しき昭和十一年の新春を迎ふるに當り、筆者は殊勝にも本年は千曲時報に毎月寄稿することを思ひ立ちまた之を約したり。

思へば一昨昭和九年も之を約し既に實行に着手したる處、その多くは編輯者の忌諱に觸れ反古筐底に投ぜられ世に出でたるもの二三を數ふるのみ、爲に中途斷絶否斷念せり。本年は自ら戒め自らを修め以て禿筆を進めむとす。編輯者の雅量と讀者の御愛顧を得て此の一年を完了するを得ば幸なり。

○

某月某日、某氏筆者に質して曰く『昭和十一年の蠶絲業はドウ動く？蠶家の執るべき方針は？』と

筆者は直ちに答へた。即ち『大地をしつかりと踏みしめよ。然らば自ら展くべし。土に謝し、土に祈れ。然らば自ら惠まるべし』と。たいした名案でもなく名答でもない、然らば何故こんな答をしたか？それにはいさゝか意味がある。

筆者は土に祈ること既に二十餘年に及んでゐる。昭和十一年、十一は即ち土である。土は万物を藏し、万物を哺み、万物を收める、默々として語らざる土の容を見よ、而かも淳々として何物かを訓ゆる土の姿を見よ……と筆者は叫びたい。人間亦土より出でゝ土に入る、之を思へば土に謝し土に祈るは當然の當然である。

懐は二十餘年の昔に溯る。

筆者が初めて土に接したのは大正二年春母校に入つた時である。或る日農場の一隅で周圍の濕つてゐる幾つかの龜裂を見出した。筆者はその龜裂を静にほじくつてみた。ところが其處には水仙の球根が静かに眠つてゐた。否眠つてるところではなく既に大なる活動に着手してゐるのであつた。その力の表現が此の龜裂なんだ。生きむとする力の偉大さと之を生かさんとする力の宏大さに感じた。

それから筆者は毎朝人知れず此の水仙を見舞つた。そして彼女が先づ水を呼び土を裂きぐん／＼伸び行く力をジッと覩つゞけた。そして水仙は吃度土に謝し土に祈つてゐることだらうと想像した。

○

筆者は母校に於て初めて農業なるものを教はり從つて初めて土なるものを知つた。そして吾等は土に祈るべきことを心より感じた。

その後實社會に出て、社會生活の上にも人格の陶冶の上にも土に祈るべきことを一層痛感し今日に及んでゐる。

長い間不況に苦んだ蠶絲業者！然しその中でも眞に土に祈る者は不況ながらもその中に活路を見出してゐた。業界好轉の曙光を見た昭和十年の後をうけた今年土に祈る者は益々榮えるであらう。然し大地に足を離す者は再び逆轉するであらう。

昭和十一年の土の年！吾等は業務精勵の上に人格陶冶の上に、將たまた精神修養の上に祈らうではないか。

（編者註―本文の筆者草野史郎氏、本名芝荒雄氏、蠶蠶科第三回の卒目下名古屋在住）

山陰急行列車

なゝめ

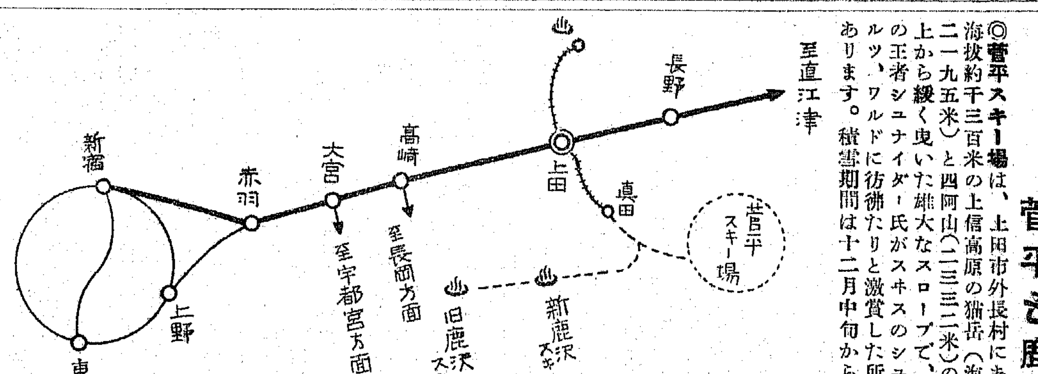
午後二時〇分綾結び神の膝下を出發した十ケ月程しか軌道を走らぬ不慣れの急行列車は充分ケタタマしい音響を先導に山陰の工業都出雲今市に滑り込んだ。下車する者皆無、乘る者廿二名。オー何と心細い事だらうか。メッチェンは一人もパーシャンまで合せて女氣は只の七人。水郷松江―誰もが『ラブカチオ、ヘルン』を想起してあの山陰雨の日に大橋の袂にナタ豆煙管をくわへ乍ら高下駄の音を聞いて獨り詩情に耽つてゐた文豪八雲の姿を―。鳥取、城崎温泉を過ぎて……小生針供養の餅を大切に黑鞄から出してその味覺に恍惚としてゐる中にトンネル七十餘を經て關西への關門福知山へ。一泊―心配無用君子の一泊―翠朝鐘紡のＳ氏（絲十一）に御會ひし郡是のＨ氏（絲十九）を訪ね御配慮を忝ふし綾部へ―何と大本教本院の下で三百名のポリの徹宵警戒の中を龜甲ホテルへ車―二本脚の―は着いた。此の騷ぎの最中俺の疲勞も知らんで飲めや唄へは失敬の奴等と夕飯を遲く食つて新年號を開いたが下の離れが喧しくて仕方ない。WＧへ出た戸口で何と偶然にＩ氏Ｋ氏の酒の廻つた赤い顏！その側にセンゲル、オヤと思つて『ＩさんとＫ君ですな』と言つたが御兩人一寸判らない。その筈だ眼は死んで四日目の鯖の樣呼吸は臨終の彼女を見とる彼のそれの如く……小生も赤ドテラに何時もの眼鏡はなし床から這ひ出した儘の姿―やつと思出したＫ『オーＫ君か！千曲會の二十回…の之？』『そうや』『ウーンどうしたんだ。まあ兎に角來い／＼』もう例の調子で怒り始めた。『何してるんだ。馬鹿早く來んか』引入れられたら顏見知りの若手のみ八名、何と偶然とは偉いものだ。之も大本さんの御蔭げだと云へば冷い箱の中で王仁三郎が涙を出して喜んでくれるだらう。Ｎ氏（蠶十五郡是蠶事部）Ａ氏（蠶七郡是大山）Ｋ氏（蠶十八郡是臼杵）Ｗ氏（同國立蠶試支場）Ｉ氏（絲十八新綾部）Ｍ氏（蠶十九郡是二日市）Ｏ氏（絲十九新綾部）Ｋ氏（蠶二十郡是蠶事部）Ｎ氏（發蠶部にゐた郡是蠶事部）小生（絲三〇）計九名。闖入せしは午後十時半だ。もう皆廻つてゐるんで小生一人テレクサイ樣だ。暴動雜言の亂射會の模樣各位の素描は急行にて省略しＫのアインツアイドライでパッパの出る時は綾部に相應しい丹後縮緬の樣な初雪がチラホラと…小生つく／＼考ふるに學校を卒へて正に三年に垂んとするに後輩なんて何處にも見當らない。Ｈ教授が三谷先生頌德碑除幕式で神國に御來綴の節今市に集つた時も皆檢定所長、工場長、取締所長、工務主任許りで小生一人一番下座だ。どうも今更ら遲く生れたのが怨めしかつたが今夜も亦斯くあらんとは！尤も一番長く生きられる可能性はＫの言ふ如く後輩にありと諦む可き哉―。翠朝雪融けのぬかるみを昨夜の御無禮の御詫び旁々新綾部郡是へ出頭して又御馳走になつて和田山まで歸つた。此處で澤山會へる筈だつたのに工場長と長い閒語つて遂ひ會へず耆繭場でＩ氏（絲廿二）に會つて御元氣ですかと言つたのみ……三朝へ着いたのが午後十一時。七十一度のラヂウム温泉で東洋一ですとか。明朝は又郡是のＮ氏片倉のＩ氏を訪ねて犬番になる爲に宍道湖を眺めて先を急がねばならぬ身、最後に御厄介になつた千曲會の先輩諸氏に御禮旁々と書くと切手代だけ彼奴儲けやがつたなんてケチな事を思ふかも知れんが左に非ずです。緣の未だない獨身者は神樣の國、出雲の大社樣へ御出で下さい。情味豊かな出雲美人を御案内致します。『いやだつき』なんて決して言ひません。

（十二月十一日）

上信高原 菅平と鹿澤スーキ場

◎**菅平スキー場**は、上田市外長村にある海拔約千三百米の上信高原の猫岳（海拔二一九五米）と四阿山（二三三二米）の頂上から緩く曳いた雄大なスロープで、雪の王者シュナイダー氏がスキスのシュワルツ、ワルドに彷彿たりと激賞した所であります。積雪期間は十二月中旬から三月下旬迄で、全部芝生の高原ですから僅少な雪量でも快い粉雪で何時でも滑走が出來ます。

◎**新鹿澤温泉と舊鹿澤温泉スキー場**は、群馬縣吾妻郡嬬戀村にある上信高原の淺間連峯海拔二千米級の十餘米兩温泉場を中心に聳立し、雄大なスロープは數粁に渉つて展開されて居ります。雪質は良好で何れも期間は十二月中旬から三月下旬迄充分滑走出來ます。



◎**交　通**

東京、名古屋、大阪各鐵道局管内主要驛から菅平及新鹿澤舊鹿澤スキー場へは（汽車、電車、自動車を含む）割引があります。

◎**宿泊設備**

△菅　平

（旅館）菅平ホテル、鐵道省山の家、高原ホテル、其他數軒

（農家）宿泊設備整ひたる家約五十戸

（收容力）旅館、農家共にて約三千人

（宿泊料）一泊三食付、旅館一圓八十錢、鐵道省山の家並農家一圓十錢

△新鹿澤温泉

（旅館）鹿澤館、鹿鳴館、増屋、小増屋

（收容力）約一千人

（宿泊料）一泊三食付、一圓八十錢

△舊鹿澤温泉

（旅館）紅葉館

（收容力）四百人

（宿泊料）一泊三食付、一圓八十錢

◎**貸スキー**

各ホテル、旅館、農家等に貸スキーの設備があり、一日一臺料金二十錢

◎**通　信**

菅平臨時郵便局開設

十二月二十日から三月卅一日まで、スキーヤーの便を計り菅平ホテル前に臨時郵便局が開設され一般の郵便事務を取扱ひ致します。

スキーのお歸りには 温い別所温泉へ

上田驛から電車に乘りますと、僅かに三十分で温泉場に到着致します。各温泉旅館共スキーヤーの御出を心からの歡びを持つて御待ち致して居ります。別所温泉は院内と大湯に分れ電車をおりまして右へ參りますと院内、左へ參りますと大湯いづれも愛宕、夫神、女神の山々に圍まれて靜かに温い湯煙りをあげて居ります旅館は十二軒何れも内湯の設備があり、他に石湯、大湯、大師湯、玄齋湯等の共同浴場があります。就中石湯は天然岩石の浴槽で、温泉は岩間より湧出し古くより名湯として知られて居ります。上田驛から東京方面へ御歸りになるには午後十時三十七分（上野着午前五時〇五分）關西方面へは午後十時四十分（名古屋着午前七時十四分）の汽車が最も便利であります。この汽車を御待ちになる間に御入浴と御夕食には何卒別所温泉へ御出かけ下さい。別所温泉午後九時五十四分の電車で御歸りになればゆつくりと右の汽車に間に合ひます。菅平ホテル前の旅行案内所では、皆樣の御便宜の爲め左記クーポン券を發賣して居ります。

お日歸券

白券　一圓四十錢（往復電車賃、一食つき）

青券　一圓十錢（右に同じ）

お宿、泊券

白券　二圓四十錢（往復電車賃、二食つき）

青券　一圓九十錢（右に同じ）

上田市北天神町

上田温泉電軌株式會社

（電話上田六五四、九六五）

草鞋後聞

ぎくだみ

○

十月廿一日の香青軒でクラス會にうす禿の先輩の一人をつかまへて『五十周年は引き受けた。まあ一パイ呑め』と云つた氣の强い奴が居た。

よく考へて見れば、あんた方はもう寄る年波だ。五十周年は迚も希めまい。後は俺達が引き受けたから心殘りなく死んで呉れと云ふことになる。大先輩に此上ない失禮な物の云ひ方ではあるが事實夫れ程誰れもが酔つて居た。

この場限りでなくこの後が續いたので到々二日目の代議員會迄怠つてしまつた。つい昔の癖が出た結果になつてしまつた千枚生と云ふ人が代議員會の議長だつたと云ふので惜しいことをしたと思つた。どんな親父かよく見て置きたかつた。あれが絶世の美人の聲だからと云つたつて此の節聲だけで滿足する樣な氣の永い奴は一人も居ない。厭でも顏を……夫れと同じ理由である。

○

自分から千枚張りと名乘り得るからには相當厚いことも厚いだらう。それに既に二十餘年も年を經て居るのだから河童だつたらそろ〳〵神通力を得てもいゝ頃合である。

初めの中はなか〳〵殊勝なことばかり云つて居たのでどうだらうかと思つて居たら近頃次第に地金を現しかけて來た。

その二三は、ある師走も日の迫つた夜半上田へ來て吹く寒風に耐え得ず、上村ホテルの門を乘り越えたとあつた。一見なんでもない樣ではあるがこれがあつさりと出來る人はまづない。必ず過去にそれに類する經驗が無くては出來ぬ藝當である。愈々困つてくれば一度盗みをした者は必ず十中の九迄殆んど夢中に又盗む。

そして盗人の手口は盗人が見れば大体の見當はつくと立派に新聞の家庭欄に示してある。その通りにその經驗のある者が推定したのだから金輪際違ひはないのである。

養蠶實習中押入に晝寢したり圃場實習に思出があることも千曲川の夕涼みの陸言や爪彈きの都々逸は考へ出せても微生物の白金耳の直徑がどれほどあつたかは考へつくことは恐らくあるまい。

しかし物事は千枚生だけではなかつたらしい。飯田支場の皆川さんにしても製絲實習室から持つて來た何かの機械を修巳寮の雨樋へ裝置して『尿素の製法』をやつたと云ふのだから推して知るべしではないか。

とまれ千枚生と云ふ人は帽子をキチンと四角に冠つてわき目もふらず下宿へ歸つた人ではなく、常田邊の格子のある暗い庭に派手な色彩の豐富な女下駄があれば屹度立止つて考へたらうし、行き過ぎたパラソルの中を美化する位の人間的色彩のあつた人かと思つて大いに吾が意を强うした。

失禮とは云ふまい。失禮位は最初から考へて居ない。下手な遠慮をすれば海千山千の千枚生を一體どう想像することが出來たか。殊に神通力も得ようとして居るのではないか。しかし無禮の點は充分無禮として詫びるつもりである。

○

黄昏の陽が川の向ふの山を肩から斜に赤く走つて居る。馬がポク〳〵と歩く。嘶くこともない。手繩を捩つた六十も近い老人は廣い背を見せて默つて居る。話しかけても答へそうにないと思はれる程である。

吐いた紫の煙がそこにそのまゝ殘つて馬がポク〳〵と歩いて行く。二十錢で乘せて貰つた駄馬の歸りである。

記念事業で見た上田の街の記憶を辿つて居るので前の樣なことが樣々と考へ出されて來る。

結局巡り巡つて盡きるのは「今年も暮れるなあ」と云ふことだつた。

上信國境（六川忠一郎氏撮影）

上田便り

菅平一尺五寸　スキーヤー待望の雪はいよ〳〵去る十二月三日我等が菅平スキー場を本格的な白銀の世界と化した。菅平の氣温は零下五度でスキーは充分可能コンデーション良好であつた。

鐘紡丸子工場三月開業か　丸子町鐘紡建築工事はその後着々進行最近は鐵骨方面はすでに完成現在は周圍のコンクリー打ちを盛んに行つてゐる。一方機關室等も出來上り今は煙突の作業中で、明春三月末頃はこの煙突から黑煙をもう〳〵と吐す樣になる豫定である。工女工男の募集は三月の學校切替時期に行ひ千五六百名募集の豫定である。

温電バスの大改正　上田温泉電車では省營バス開通に伴ひ十二月十一日より左の如くダイヤを改正し、省營バスの連絡と菅平、新鹿澤スキー客の便を計る事となつたが之れで實質は省營バス上田乘入れと同樣の効果があるわけである。

△バス回數　上田―眞田間五回、上田―傍陽間五回

△料金　眞田行上田驛より四十錢、郵便局前より卅八錢、川原柳より卅一錢、傍陽行上田驛より卅七錢、郵便局前より卅五錢、川原柳より廿八錢、

△時間表

眞田行

前八、一〇　一〇、〇〇　□一二、〇〇　後二、〇〇　四、〇〇　△六、四〇

傍陽岡保行

前七、〇〇　九、〇〇　※一一、〇〇　後一、〇〇　三、〇〇　五、〇〇

（但し□は夏期、△は冬期のみ運轉

※は不定期運轉）

時局問題講演會　上田市役所並郡市聯合分會、同將校團、青年團外各團體主催の日支時局問題講演會は講師に陸軍少將谷實夫氏を迎へて十二月十六日午後一時より母校講堂に開催した。同少將は兵庫縣出身、嘗て松本聯隊長として信州健兒の教育訓練にあたられた外日支事變には上海へは師團參謀長、熱河戰には十六旅團長として出征赫々たる武勳をかゞやかした勇將である。

上信バス開通式　上田から澁川、上田から草津を完全に連絡する省營バス九十九キロは十二月十一日より開通し、これが祝賀式は鐵道省並に協賛會主催で十日午前十時三十分より群馬縣澁川小學校講堂で開催され、内田鐵相（代理）を始め鐵道省高官、群馬縣知事、本縣知事（代理）沿道町村長其他來賓三百餘名にて盛大に擧行された。

依田社の閉業　丸子町依田社では十二月廿一日を期して一齊に夏挽閉業したが前年よりは三日早い。

柔園改植三分の一に減ず　上田蠶業取締所に於ては十二月六日より第一次堀取實地査定を行つたが、實施面積は小縣整理二万六千四百アール、改植一万二千八百十三アール、混作一万一千百六十五アール。上田市整理千百廿八アール、改植五百四十二アール、混植五百五十アールで昨年度に比し三分の一の大激減、原因は繭高からにはかに養蠶に心をひかれた結果である。

蠶種王國の小縣　明年度上田蠶業取締所管内に於ける各蠶種家の春夏秋蠶種製造額はこの程同支所に於て漸く檢査を終了發表されたがそれによると最高數量を示すものはなんと言つても平和×安泰で一一五、二五五瓦次が安泰×平和で四〇、八四〇瓦最も僅少は平和×日新で十二瓦でその合計蠶種製造高は二四四、三三九瓦前年度に比較して繭價高の影響を受けて幾分增加の傾向を示してゐる。

北信支會總會開催通知

左記に依り北信支會總會を開催する。奮つて御出席を乞ふ。

記

一、場所　上山田温泉清風園

一、期日　一月十二日午前十時

第二回蠶學談話會

―養蠶、製絲、紡織各科合同會―

前號に於て豫告した蠶學談話會は既報の通り一月十二日左記の如く開催する事になつた。

實は此の日は北信支會總會があるので之に合同して此の研究會を開く事にしたのである。他支會會員の御出席をも歡迎する。

記

一、場所　上山田温泉　清風園

一、期日　一月十二日（日）午前十時より

一、特別講演（午前中）

一、絹の新規用途に就て　井上柳梧先生

一、研究發表

飼育條件と繭絲纖度及蟲質との關係　松村季美氏

題未定　製絲科

題未定　紡織科

母校ニュース

甘茶會美術展　本校甘茶會主催の第十四回美術展覽會は十二月一日から一週間本校一號教室に於て開催、出品物は寫眞、書、繪畫、手藝品、生花等九八點に達し其の外に校長先生御出品の書畫數點あつた。

矢張寫眞は斷然多かつたが廿五周年記念祝賀で多忙だつたせいか例年に比し出品數は少なかつた樣である。

△日本畫の部
朝顏、山水、水仙、びなん桂、たそがれ水仙の翁、菊とスキーピー(井上柳梧)、千曲の暮雪、櫻花軟水、桃源、相馬ケ原昇雲、桐花軟風、高原春霞(石倉新十郎)

△書の部
半折(佐藤春太郎)、短册(藤田武子)

△手藝品の部
ペインテックス二品(藤田武子)、ペインテックス(關山琴子)、折紙人形(關美代子)

△寫眞の部
小猫、あひる、湖畔の家(松浦彰義)子供、演習、滋の印象、青春謳歌、菅平、食事、樹の間より、雪の日(久保田不二夫)、海邊、自畫像(倉澤美德)、或日曜日、白波、雲海、岩山を行く、渚(小木曾員佐雄)、雲海、しゝうど、鹿島槍の雪溪、殘雪、杏咲く村、村の春、いくの松原、後立山連峯、のし菌、雪溪を登る(井上柳梧)、池(野口新太郎)、斜面、春を前に、靜寂の猫岳、一畔の天龍、自然の歡喜、しぶきに濡れて(齋藤利雄)、公園風景二種、小憩(宮坂收)、林間、角間峠頂上にて、歡呼、後立山、針之木より展望、雪庇、菅平風景(茅野功)、晩秋、水車小屋(枇杷木瀧雄)、淺間山遠望、犬吠岬(濱村一彦)、樹氷の朝、上信國境、大明神澤(六川忠一郎)、高原の牧場、溜池(池內眞吾)、スキー(宮原英夫)、菅平、影、子供(平尾孝平)、秋、もう歸らう、春、白壁、コヤス貝、火の見のある風景、夏の光(町田博)、春の光、高原に立ちて(石松博)、大天井岳、秋深き美ケ原(武井仙太郎)

△繪畫(水彩畫、油繪、デッサン等)
風景、デッサン、染屋の秋(赤尾文顯)、夕方の太郎山二種、黄金澤の午後、晩秋風景(武井仙太郎)、晩秋の烏帽子岳(小林敏)

△生花(仲藤潮)

蠶絲學雜誌第八卷第三號原稿募集

一、雜誌發行豫定　三月十日頃
一、原稿締切　**一月三十一日**

一月一日　蠶絲學雜誌編輯係

談話會例會　談話會例會は每金曜日第十一教室で催されたが時日、題目、談話者左の如し。

十二月六日(製絲、紡織受持日)
一、石灰の含有量と溶解速度との關係　片岡金一
一、多孔性物質の直徑測定　志田敬夫
十二月十三日(理化學受持日)
一、絹紙製造に就て　六川忠一郎
一、片面捺染兩面染色に就て　小松忠一郎

近藤義信氏の新任　母校紡織科第十四回卒業、直ちに大阪市外山本毛絲紡績株式會社勤務其後國家の干城として各務ケ原航空隊へ入營せられし同氏は此程除隊せられ十二月五日附を以て副手を命ぜられ紡織科に勤務せらるる事となつた。

昭和十年度談話會納會　十二月二十日午後二時より第十一號教室に於て本年度談話會納會を行つた。當日は特に校長先生の御話もあり、極めて盛會であつた。尚講演終了後茶話會を開き午後六時散會した。

談話者並に題目は左の通りである。
一、御挨拶　校長先生
一、人造放射性物質の話　原田先生
一、蠶繭解舒に就て　鷹野誠一
一、室內空氣の自然對流を觀察する方法に就て　白井美明
一、生物輻射線に就て　蒲生俊興
一、ソ國に於ける研究機關　井上先生

スキー指導者講習會　文部省主催第四回スキー指導者講習會は一月六日より十二日迄の七日間、菅平高原體育研究場に於て左の講習科目及講師にて開催される。

一、講義　冬期課外運動の意義(二時間、體育研究所技師、大谷武一氏)、スキー術概說(五時間、長野縣視學員、小野廣中)、スキーのトレーニングに就て(二時間)
二、演習　スキー術及スキー體操(二八時間)講師　小野廣中、西山實幾、篠原節、保科武雄(全日本スキー聯盟技術員)

因に母校よりは廣川正治、鷹野誠一、茅野功の三氏が受講の豫定である。

平塚博士の母校視察　文部省囑託督學官現農林省中野蠶業試驗場長平塚英吉博士は十二月十三、十四の兩日に亘り母校施設內容を視察された。

林教授講師として橫濱に出張　全國産業組合製絲組合聯合會主催講演會が十二月十日より十四日迄五日間に亘り橫濱に於て行はれたが本校よりは林教授が講師として招聘せられ十二、十三の兩日製絲現業概論の題下に講演された。

本會記事

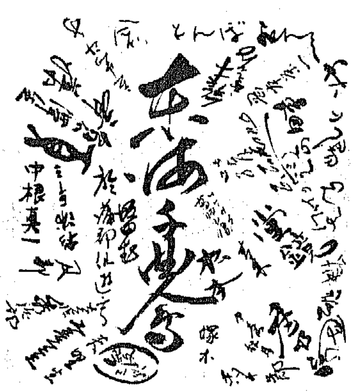
本會日誌

十二月十二日　會館附屬板塀新築寄附願提出す
十二月十七日　長野縣蠶業試驗場松本支場寄宿舍の一部火災の爲め燒失につき見舞狀を發す
十二月二十一日　入會金未納の各位に對し送納方依賴狀發す
十二月二十三日　會館附屬既設工作物(水道照明裝置)の寄附願提出す
十二月二十四日　名古屋遞信局宛千曲時報發行臨時變更屆提出す

支會通信

東海千曲會總會

東海千曲會總會の記事は先月號に掲載いたしましたが其節の寄書は原稿より遲れて到着した爲先月號に間に合はず本號に載せた次第です。（編者）



神奈川千曲會豆ニュース

組合製絲の重要性認識の目的で農林省の委囑により横濱生絲檢査所に於て組合製絲理事者の講習會が横濱に於て開催された。主催は全産組聯合會で、期日は暮の十二月十日から五日間の豫定で之の講師として上田から林教授が見えた。林教授の擔任科目は製絲現業概論であつた。

神奈川千曲會では之を機會に十三日正午より市內さくらやまグリルにて會合を催し、小岩井會長以下約四十名出席し談笑の中に會食した。

廿五週年紀念の盛會なりしを語り合ひ一、二回卒業の先輩連の懷古談から、紐育歸へりの方々の打明け話まで愉快な會合であつた。

尚林教授は同夜東京に出て一泊し、校長及び蒲生教授と會はれる豫定との事でお別れした。（十、十二、十四）

敍任辭令

母校之部
十二月五日　臨時副手ヲ命ス絹紡織科勤務ヲ命ス　近藤義信

舊職員之部
十二月二日　敍從七位　早乙女新一郎

卒業生之部
昭和十年十二月二日　十一級下賜　地方農林技師　万石安太郎
昭和十年十二月七日　敍從五位　本間直人
昭和十年十二月十九日　敍勳六等授瑞寶章　地方農林技師　石川縣農林技師ニ補ス　菅原勇治

廿五周年記念事業

第二十回醵出金納入者

（十二月十七日現在○印は完納）

拾五圓也　○宮澤　勇(蠶十三)　○中村治三郎(紡十)
拾圓也　○金兒文夫(蠶六)　永井勝未(蠶十四)
五圓也　○深澤　潔(絲十八)　○赤松與一(絲十八)　○延命幸次(絲十九)　○關三四郎(絲十九)
貳拾圓也　佐藤嘉三郎氏　宮入眞一氏

合計金壹百拾五圓也
累計金壹萬八千百五拾貳圓七拾錢也

正誤訂正

千曲時報十一月號に於て酒井淳夫(絲十八)十五圓納入と掲載の分は誤りに付左の如く訂正す
○十圓也　酒井　淳夫(絲十八)
○五圓也　井立喜三郎(絲十三)

二十五周年記念事業費中へ御寄附

昭和五年五月本校蠶絲科選科へ入學せられ病氣の爲め中途退學せられたる埴科郡五加村宮入雄吾氏の御尊父眞一殿は十二月十二日御來校廿五周年本會記念事業費中へ金貳拾圓御寄附爲された。折角の御厚意に付難有受納した。本紙上より謹みて感謝の意を表する次第である。

會員動靜

（十二月二十日現在）

絹村　貢(蠶一一)(勤)仙臺市、宮城縣廳農務課(住)仙臺市北二番町一〇
市村志眞一(蠶一八)(勤)宮崎縣都城市、日東製絲都城工場
西澤　正衛(蠶二二)(兵役)朝鮮咸鏡北道羅南山砲兵第二十七聯隊第十中隊ノ二(訂正)
神戸　敏夫(絲一二)(勤)群馬縣新田郡尾島町、群馬社東毛工場
大塚　精一(絲一七)生井(ナマヰ)ト改姓
大石　唯男(絲一九)(勤)朝鮮江原道春川郡、江原道蠶業取締所(訂正)
飯田　寄雄(紡一四)(勤)ナシ(住)南安曇郡溫村檜
森　ふじい(舊教一三)(勤)ナシ(住)長野縣小縣郡中鹽田村大字本鄉

訃報

弔慰金募集

本會々員　故高山裕氏(蠶十三)の弔慰金を募集致します。然して右弔慰金は二月末日迄に取纏め御遺族へ贈呈致したいと思ひますから夫れに間に合ふ樣振替口座東京第四三三四一番へ高山氏弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい。

昭和十一年一月　千曲會

故松澤德衛氏(蠶一)御遺族よりの御寄附

故松澤德衛氏御遺族北安曇郡神城村松澤由彌殿より本會へ金貳圓御寄附爲された。切角の御厚意に付難有受納した。本紙上より謹みて感謝の意を表する次第である。

弔慰金報告

故富岡泰氏弔慰金第二回
金參圓也　宮崎千曲會一同
累計金八圓也

會費領收

（十二月二十日現在）

昭和十年度通常會費納入者
（○印は蠶絲學雜誌代共）
○西山市三(蠶九)　○中曾根長男(蠶十四)

千曲會規則第九條第一項中第三號による未納會費納入者
金六圓也　中澤　忠(絲一)
金五圓也　矢澤茂登一(蠶一)　金　學仁(蠶一)
山本辰五郎(蠶一)　宮坂　正彦(蠶二)
小高　喬(蠶二)　幾田　精一(蠶二)
松岡　道也(蠶四)　太田　清藏(絲一)
兒玉　忠雄(絲二)　杉野　壽一(絲三)
須田國之助(絲四)　宮入　誠一(絲五)
金四圓也　中村　吉男(絲五)
金參圓也　磯野　良知(蠶二)

蠶絲學雜誌未納分納入者
金貳圓也　磯野　良知(蠶二)